

〔翻訳：動物倫理の西洋文化6〕

キリスト教神学における動物の位置

ジャン=ピエール・ヴィルス

Das Tier in der Theologie

Jean-Pierre Wils

河野 眞(訳)

Japanese translation by KONO Shin

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: takakons@vega.aichi-u.ac.jp

〔解説〕

本稿は、これまで本誌に掲載してきたシリーズの「動物倫理の西洋文化」6として掲げる、ジャン=ピエール・ヴィルスの論考「キリスト教神学における動物の位置」の全訳である。はじめに書誌データを挙げる。

Jean-Pierre Wils, *Das Tier in der Theologie*. In: Tiere und Menschen. Geschichte und Aktualität eines prekären Verhältnisses, hrsg. von Paul Münch. Paderborn u.a. 1998, 407–427.

ジャン=ピエール・ヴィルスは1957年にベルギーのアントウェルペン州ヘール (Geer / prov. Antwerpen) に生まれたベルギーのカトリック教会系の神学者・倫理学者である。ベルギーのルーヴェン大学とドイツのテュービンゲン大学でカトリック神学を学び、1987年に博士学位、1990年に教授資格を得て、以後、テュービンゲン、ウルム、フライブルクの諸大学で教授として教え、1996年からはベルギーのナイメーヘンに所在するカトリック教会系のラドバウド大学 (Radboud-Universiteit Nijmegen) 神学部の神学倫理 (theologische Ethik) の主任教授、また兼任として同大学宗教学部の「宗教からみたモラルをめぐる文

化理論」部門の主任教授である。

ヴィルスは、その行動が話題になることも何度かあった。よく知られるのは、2009年にカトリック教会を離脱したことである。それは、教皇ベネディクト十六世が、(第二次ヴァチカン公会議を行きすぎた近代化として伝統を重んじる)ピオ十世会の四人のメンバーの司教叙任取り消しを回復したこと、とりわけホロコースト発言で物議をかましたイギリスのリチャード・ウィリアムソン司教が含まれることへの抗議であった。また安楽死問題でも有力な論客であり、一定の条件下で容認の姿勢を取り、その面でのルールづくりを特にドイツの幾つかの州政府と共に進めている。

本稿について

西洋文化における動物倫理の問題は訳者が関心を寄せる分野の一つである。今日では、動物愛護は世界の趨勢であり、いわゆる〈動物の権利〉を説いたり検討したりする論説も数多い。特定の動物を保護することを過激なまでに主張する向きもあり、伝統的な動物利用とのあいだで確執も起きている。またそうした場合、通常、人間が最も保守的な姿勢をあらわにする二つの要素がからんでいる。すなわち食習慣と宗教である。食べものは〈おふくろの味〉のフレーズがあるように生活における嗜好の根幹をなし、その上に慣れない料理へのポジティブ・ネガティブの行動が重なっている。ポジティブとは珍味への挑戦であり、ネガティブとは親しまない料理・食材の排斥である。そしてそれは、人間が生い育った場での総合的な世界観である宗教と重なることが少なくない。

この問題にはここでは立ち入らないが、西洋文化の動物倫理に関心を寄せるのにはそうした背景がある。今回取り上げたのは、キリスト教と動物倫理との関係である。今日では、キリスト教は元々動物愛護の宗教であったといった熱狂的な主張も見られるが、本稿の論者は、問題点を冷静に整理している。もっとも、論述の枕に挙げられたバーベリやホーフマンスタールの位置づけはやや筋違いな感じもするが、専門領域では思索の確かさを感じさせる。短い論説ながら、キリスト教の教学、とりわけ環境問題も含めて現在ホットなテーマである創世神学に焦点を当てて動物の問題をまとめている。目下活躍している神学者の見解として注目し、紹介を試みたのである。

Sep. 2016 S. K.

I. 記録をもとめて

神学でも教会の関心でも、動物が中心に位置することはめったになかった。1967年、ⁱカール・アンダース・スクリーヴァーは、そのものずばりのタイトルを著作に冠して問題を提起した。曰く、『動物に対する教会の裏切り』。これをテーマにするなら、すでにそれによって、動物は間接的ながら**倫理的な**脈絡におかれることになる。なぜなら、キリスト教の神学においても、他の宗教とその教学においても、動物シンボルには頻繁に出遭うからである。それゆえ私物をめぐって、非難されるような無関心が、特に**倫理的に**先鋭化した注目や感覚と拮抗している。

事実、動物の苦しみは、少数の重要な例外をのぞけば、ヨーロッパの思考と知覚のいわゆる〈未踏の地〉に属している。動物の抑圧の歴史であるが¹⁾、その紛れもない例外の一人にⁱⁱイサーク・バーベリがいる。1920年のロシアとポーランドの戦争を報告した記者である。当時バーベリは、かの有名ないしは悪名高い赤軍のコサック将校ⁱⁱⁱセミヨン・ブジョーンヌイ軍団の輜重部隊に籍をおいていた。主に〈騎馬兵連隊〉に属した彼は、歯切れのよい文章で（それは報告だけでなく日記もそうなのだが）、このほとんど忘れられた戦争の想像を絶する荒廃を描いた。そしてそれを公開したことによって、命をうばわれた。20年後、彼はスターリンによって処刑されたのである。とまれ、数多くの悲劇を書きとめると並行して、彼は、動物の虐殺を見過ごそうとはしなかった。とりわけ、傷ついて死んでゆく馬である。なかでも、次の一節は、まことに悲痛である²⁾。

居並ぶ兵舎の一屋のそばに、突き殺された雌牛が横たわっていた。はじめての仔牛を生んだばかりだった。地面には青白い乳房と、きれいな皮。筆舌に尽くせないほどの苦悶。殺されたのは若い母牛だった。

この悲嘆は、〈人並み超えた文明度〉のブルジョワ人士が、暇つぶしかどうかはともかく、大げさに嘆いてみせて、感情の〈立派なことを果たす〉のと同じではない。まったく逆で、バーベリは、戦争のなかで文字通り昼夜を問わず目の当たりにすることになった**あらゆる**苦痛と阿鼻叫喚の不屈の記録者であった。しかし、人間に加えられる言語を絶する残酷さのまっただなかで、牛や馬やミツバチの運命にも大きな注意をはらっていた。バーベリは、戦争を、**あらゆる**生き物に向けた戦争として体験したのである。

また別の種類の危機状況から生まれたのが、^{iv}フーゴ・フォン・ホフマンスタールの作

1) これは、動物愛の内面的な形態 (innere Fomen) にもあてはまる。参照, Midas DEKKERS (1994).

2) Isaak BABEL, *Tagebuch. 1920*. 1917年7月20日の記載 (ed. 1990), 45.

品、すなわちチャンドス卿がフランシス・ベーコンに宛てたという設定の手紙である。チャンドス卿の姿に託して作家は、宗教信仰が〈崇高な〉しかし尻込みするような〈アレゴリー〉になってしまう創造の一大危機について語る。そこでは、〈地上の諸概念〉が等しく後ずさる。〈精神〉、〈魂〉、あるいは〈身体〉といった言葉が〈口のなかで〉で、〈黴の生えたキノコ〉のように崩れてゆく、とホーフマンスタールは語る³⁾。それと並行して、チャンドス卿の知覚のなかで、奇妙な具象化が起きる。〈まったく何でもないもの〉を〈高次な生〉の容器にしてしまうような日常の状況である。〈如雨露や、畑に放置された馬銜や、日向にいる一匹の犬〉⁴⁾、そうした取るに足りない〈事例を取り上げることをお許し願いたい〉と断って、チャンドス卿は、次のような体験を書き記す⁵⁾。

先日もこういうことがあったのです。私は、ある酪乳場の牛乳室に巣食うネズミらに、毒薬をたっぷりふりかけて置くように命じました。そしてその夕方、遠乗りに出かけたときのこと、ご想像いただけると存じますが、もはやそんなことは忘れかけていたのです。ところが、延々と続く、鋤き返された耕地のなかを並足で馬を進めていたその時です。近くには追い立てられた一羽の鶉の子が飛びまわり、遠くには、どこまでも延びる畑地の起伏の彼方に巨大な夕日が沈もうとしている他、何一つ見当たらなかったのですが、突如、私の心の中に、あのネズミの群の断末魔の苦悶に満ちた地下室の光景が浮かびあがったのです。すべては私の心のなかに厳然と存したのです。毒薬の甘く鋭い臭気で満ちた、冷たく息苦しい地下室の空気も、黴臭い壁にぶつかって跳ね返されるネズミたちの断末魔の甲高い叫び声も、彼らが気を失ってもつれ合い、かたまりになって痙攣している有様も、絶望の余り入り乱れて突進する様子も、そして狂気のように出口を探しもとめて、塞がれた隙間で二匹が鉢合わせしたときの憤怒の冷酷な目つきも。……そこにいたのは、死に瀕して痙攣している我が子たちに囲まれている一人の母親でした。しかも彼女の眼差しは、正に息を引き取ろうとしている子たちに注がれてもいなければ、無情な石壁にも向けられていません。それは虚空に、あるいは虚空を突き抜けて無限の彼方に向かい、しかもその視線は歯ぎしりを伴っていました。——もし硬直しつつあるこの*ニオベーの傍に一人の奴隷が、気絶せんばかりにふるえつつ立っていたとすれば、その者こそ、私の心の中でネズミの魂が恐ろしい宿命に向かって歯を剥いたときに私が味わったのと同じ思いをもったことでしょう。

*[訳注] ニオベー (Niobē) ギリシア神話では、主神ゼウスに愛されて七人の男児と七人の女児を得たが、多子を自慢したため、同じくゼウスの愛を得た女神レートーの怒りを買って、レートーの子で

3) S.465.

4) 同上, S.467.

5) 同上, S.467f.

あるアポローンとアルテミスによって子供すべてを殺された。その止むことのない嘆きのために、ゼウスによって（あるいは他の神によって）ニオベーは石に変えられた。

ホーフマンスタールは、断末魔のネズミに、母子のメタファーをもちいるのを躊躇しない。遇喩性は、非常なふくらみをもたらすと共に、とてつもなく挑発的で、問題を投げかけるものとなっている。それは、ネズミに対して〈母親〉という言い方がされるからだけではない。むしろ要点は、〈恐ろしい宿命に向かって歯を剥いて〉いるこの動物の〈魂〉にある。ある人には瀆神の業であるが、それが他の者には適切なものとなる。

「チャンドス卿の手紙」を偉大なアレゴリーと受けとめることもできないではない。すなわち、〈魂〉や〈精神〉といった西洋の王道的なカテゴリーが明証性を喪失する劇的な語り物としてとらえることもできるはずである。この偶警性のマクロ・コスモスから残るのは、まことに魅力的かつ決断を迫るようなもの、すなわち動物という対象のマイクロ物理学である。

バーベリと同様、ホーフマンスタールもまた動物に対する戦いについて語る。〈日向の犬〉が糸口になって、言いようのない、違和感を思い知らせる開示が起きる。所詮、人生の危機において見舞われ、ほどなく止む過度の感傷性と見るのは、バーベリについてもホーフマンスタールについても的はずれである。この二人の作家が取り上げたのは、むしろ、別の注意力、別の知覚、見方と感じ方の新しい様式、ありきたりの思考と行動の転倒であった。そこで語られる回心は、永く閑却にされていた動物倫理への前段階であると共に、掘り下げてみると、まだそれ以上でも以下でもない。たしかに逆転ではある。しかしなお誰に向けてでるかも定かでなく、普通に使えるだけの形になってもいず、根拠を極めるところまで行ってはいない。

II. 歴史回顧：スケッチ

はじめに、動物倫理に意義のある理解にかかわるエポックを簡単にみわたしておきたい。アリストテレスが実際のかもしれない。そこではあらゆる生き物が徹底して目的論的・ヒエラルヒー的に結びつけられて人間に至り、そのため〈万物は人間のためにつくられている〉とする⁶⁾。動物は人間の活用能力に服従している。狩猟は、〈自然権にかなった〉〈戦争〉と表現される。聖書の記述は、動物支配を正当化するにあたって、そこまで冷徹でラディカルでもないと思われる。アリストテレスにあっては、形態変成論的思考からは自明な動物霊魂への注目も⁷⁾、モラル的な屠殺抑制に向かう必要がなかったことをも

6) ARISTOTELES, *Politik*, I.8, 125b.

7) ARISTOTELES, *De anima*, II. 413a22–414a (ed. 1950).

知ることができる。〈魂あること〉は、事実として理性あることを意味しない。総じて、近年の神学の文脈では、〈魂〉(Seele)が概念として解されるべきか、それともメタファーと見るべきなのかがまったく不明であることが屢々である⁸⁾。

神学の論議が^vアリストテレスの目的論を養分にしていることは疑えない。^{vi}オリゲネスにとって、〈理性をもたない被造物〉は理性をそなえた創造の産物すなわち人間に従い奉仕しなければならないのであった⁹⁾。^{vii}アウグスティヌスも、動物世界を、神の救済計画の外に置いた。しかし動物の痛みを感じる能力についてはすでに論じていた¹⁰⁾。

感覚をもつ生き物は、痛みに堪えるとしても、痛みを感じない石よりも優れているのと同様、理性ある存在が、たとえ呪われてはいても、理性をもたない、またおそらく感覚をもたず、それゆえ呪われていることをも受けとめない存在よりもはるかに優れている。

ここには、後の動物倫理のあらゆるものが先取りされている。それは、動物が痛みの能力をもつことである。もとより、長い目で見れば、アリストテレスの考え方の影響が支配的である。しかし、(後に)神学において重要となる要素も、動物省察のなかに押し込められている。すなわち、神の愛である。^{viii}トマス・アクィナスはこう記す¹¹⁾。

理性なき生き物が、聖なる愛によって愛され得るのは、我らが他者に臨んで抱く善と同様である。我らが、聖なる愛から、それらが神の荣誉のために、また人間も役立つために享受されるのを欲している。かくしてそれらをも、神は聖なる愛によって愛し給う。

種と種をめぐる批判的な比較論に出遭うことは稀であり、事はむしろ懐疑的伝統のなかにより多くおかれている。そうした比較は、むしろ人類学的ペシズムの表現であろうとする。人間と動物の格位比較をめぐるたいそう美しい省察をおこなったのは^{ix}ミシェル・ド・モンテーニュであった。有名な「レイモン・ズボンの弁護」のなかでは、人間の傲慢が難詰される¹²⁾。

(人間は)……その身を神に比べ、その身に神の性質をさずけ、ひとり偉そうに他の被造物の群から離れ、同類同胞たる動物に分け前を呉れてやり、この程度なら差支えあるま

8) 参照, Gotthard M. TEUTSCH (1987).

9) ORIGENES, *Contra Celsum*. *Opea* 4, 81. In: GSC, Opera I und II.

10) AUGUSTINUS, *De civitate Dei*. 12,1. (ed. 1961/64).

11) Thomas von AQUINO, *Summa Theologiae*, II-II, p. 25, art.3 (ed. Madrid 1951).

12) Miches de MONTAIGNE, *Essais*. (ed. 1953), 433.

いと思えるような僅かな能力だけを彼らに分ち与えている。人間は、その叡智の力をたよりにして、動物の内部の隠れた動きをどんなにして認識すると言うのか、どんな風にして彼らと我々とを比較して、彼らは馬鹿だと結論づけるのか。

私が猫と戯れているとき、猫の方こそ私を相手に暇つぶしをしているのではないのか。……私たちが自分自身を理解していないのは誰の欠陥のせいであるかも明らかにされてよいだろう。なぜなら私たちが彼ら（=動物）を理解していないのと同じように、彼らも私たちを理解していない。同じ理由から、私たちが彼らをそう見ているのと同じく、彼らも私たちを理性無き家畜と見ているかも知れない。私たちが彼らを理解していないのは不思議なことではない。私たちは、バスク人をも、穴居人をも理解していないのだから。

^xルネ・デカルトによってはじめて、また神学の考え方が薄れる一方になるなかで¹³⁾、はじめて、動物世界に、自然をめぐる普遍的な解明モデルとしての機械論があてはめられた。デカルトは、動物は言語をつかえない、あるいは少なくとも、言語外能力と判明するようなものを駆使しない、と考えた。そうした能力が欠けているのは、動物は考えるということがなく、〈自然にうごき、バネのように機械的〉¹⁴⁾だから、と言う。〈音声あるいは意思表示によって何かを示される〉のであれば、思考ないしは自己意識があると推測されるが、動物にはそれは証明され得ない、とされる。と同時に、デカルトは、次のような限定をもほどこす¹⁵⁾。

考えるということは動物には決してみられないことは確かではあるが、だからと言って、私は、思考が動物にはまったく欠けていることが確かなものとも思っていない。なぜなら、人間の精神は、動物の心をつきとめることはできないからである。

^{xi}バールーフ・デ・スピノザにとっては、人間の（理性とむすびついた能力という意味での）特性から直接的に導き出されたのは、人間は、動物を、それが感覚能力をそなえてはいても、無制限に利用してもよいことだった¹⁶⁾。

13) 歴史的に厳密な再構成は、マティーアス・シュラムの次の研究を参照、Matthias SCHRAMM (1985); また同じ論者の次の論考をも参照、DERS., *Vertzung und Integrität*. (1992), 111–158.

14) DESCARTES, *Brief an den Marquis von Newcastle. Egmond 23. November 1646*. In: *Œuvres, Correspondence V. Paris 1974. Brief CDLX*, 568–577.

15) DESCARTES, *Brief an Henrichs Morus vom 5. Februar 1649 aus Egmond bei Alkmar*. In: *Œuvres, Correspondence V. Paris 1974. Brief DXXXVII*, 267–279, 277.

16) Baruch de SPINOZA, *Die Ethik nach geometrischer Methode dargestellt*. (ed. 1976), 221.

動物を屠殺すべきないとするあの法律は、健康な理性に基づくのではなく、むしろ空疎な迷信や女々しい憐憫に根差すことが判明する。我らの有用をもとめる理性の鉄則が教えるのは、我ら人間どうしが結びつかねばならないことであり、結びつきの相手は、人間的な自然とは異なったものである動物でも事物でもない。むしろ鉄則に徴すれば、我らは、動物が我らに対してもつと同じ権利を動物に対してもっている。正に、どんな権利も、徳あるいは力によって決められるのであるから、人間の動物に対する権利は、動物の人間に対する権利よりもはるかに大きい。だからと言って、私は、動物が感覚をもつことを否定するのではない。それを以て、我らの有用を考え、そのために最も適切な使い道のために好きなように使用し扱うことはゆるされないとの考え方を否定する。何となれば、動物は、自然のおもむくところ、我らと一致するところがなく、その仕草は、自然のおもむくところ、人間的仕草とは相違するからである。

かくしてスピノザは、人間と動物のあいだに断絶をつくった。それは、動物とのつきあいにおいて人間の恣意をモラル制限にとつて、なにはともあれ克服できないような溝でありつづけることになる。

それに引き替え^{xiii}イマヌエル・カントの論説は、やや抑制されてはいるが、あいまいなところがある。そこでは、人間は、動物に対していかなる責任も負っていないが、人間以外の生き物の苦痛を避け尊重するのは**間接的な義務**とされるのである¹⁷⁾。

動物を暴力的または残酷に扱うのは、人間の自己自身に対する義務に背く。それによって、それらの苦痛への同情が人間のなかで押しふさがれ、それによる他の人間との関係における道徳性に役立つ自然な素質が弱められ徐々に抹殺されるからである。

この論議を、苦悶とは関わりのない単なる教育的な意図と解するのは不当であろう。しかし生き物が独自の権利をもつことは、カントにおいては、やはり想定されてはいない。

あらかじめまとめておこなうなら、哲学と神学の伝統は、動物の痛みと苦痛に堪える能力を認識するものであったとすることができるだろう。しかしそれをめぐる識知と行動とは、一般の例にもれず、大きな幅があった。そして^{xiiii}ジェレミ・ベンサムにおいて、はじめてそれは、法(正義)倫理の文脈に引き上げられた。正に、動物は、神学の面から、救いの愛の対象となり、カントのような、人間の道徳能力の支柱と解されるだけのものではなくなった。動物モラルとの関わりにおける法(正義)思考があらわれるのは、ずっと後であり、また哲学にまで入るには躊躇が大きかった。ちなみに^{xiv}アルトゥール・ショーペ

17) Immanuel KANT, *Metaphysik der Sitten*, §17. (Phil. Bibl. 42. Ed. Hamburg 1966).

ンハウアーはこう語った¹⁸⁾。

動物のいわゆる没義務、それらに対する私たちの扱いにはモラルの意味づけはあり得ないという妄想、あるいはそうしたモラルの言い方では、動物に対しては義務はないといったこと、……これは西洋の過度の粗野と野蛮である。

しかし法倫理の流れができるには、なおかなりの時を待たねばならなかった。

III. 神学の思念から見た動物

神学の考察の文脈では、数年前から、動物倫理問題をめぐって過度の（エキセントリックなまでの）関心が起きている。それは、一般的な環境破壊、また同じく動物世界との破壊的な扱いのあり方に、キリスト教が、その現実との関わりの歴史のなかで、特に負い目をもつようになったことを意味する。このスケッチを二つの局面に分けることができる。一つは、いわゆる〈脱神性化〉(Entdivinisierung) あるいは〈脱霊性化〉(Entsakralisierung) と呼べるものである。ちなみに一神教に対しては、聖性のすべてを内面の世界と事象に帰着させることが重くのしかかっていた。すなわち一神教の超越的な神は、その被造物から後退し、人間以外のかくしてばらばらになった生き物にたいする人間の勝手放題が可能になったとされる。

二つ目も、それと密接に関係するが、聖書に記された支配者の任務、すなわち地上の主 (dominum terrae 「創世記」第一章28b節) への責任、すなわち人間は (西洋では) は創造の主人へと邁進することができた。この二つの局面から期待されるのは、キリスト教からその含意への創世神学の切り替わりが特に問われることである。

事実、創世神学とその連関、殊に創世記という土台をどう読むかに議論は集中している。なおその議論にあっては、ユダヤ教には、一般に影にかくれた程度にしか注意がはらわれずにいる。実際には、旧約聖書の創世に関する理解 (これがいわゆる責任の主たる重みであるが) は、そもそも (また特に) ユダヤ教に起源をもつのである。

この二つの側面は、一見、ほとんど間接的な証明であるとの異論にみまわれるかもしれない。事実、一神教は、その現実の歴史では、世界からの神の後退へ向かっている。神の光輝 (エピファニア) は、あいまいの度合いを強め、素材から離れるばかりである。しかし注目すべきことに、これは、旧約聖書の広い意味でのテキスト伝統にはあてはまらない。大きくは環境破壊、特殊には動物虐待への不感症と、一神教とのあいだには、単純な

18) Arthur SCHOPENHAUER, *Über die Grundlage der Moral*. (ed. 1977), 278.

内容連関はほとんど成り立たない。さらに、脱・靈性化のテーゼは、必ずしも思弁的ばかりではなく、また経済的な効果批判に**しばられない**意味づけなら、文化に特殊な変容・発展へのモチーフかつエンジンとなるという見方をたやすく曇らせることができる。アニミズムや多神教といった宗教の多彩な型を射程においてきた比較宗教学も、この画一的な主に拠りどころのないことを明るみに出しかねない。

それに対して、驚くのは、苦痛の評価が比較の基準に取り入れられることがなかった事実である。苦痛を称賛し崇高と見る傾向（それは特にキリスト教であり、ユダヤ教ではずっと低調である）が、他の生き物の苦痛を軽視するというもう一つの傾向を助長した、との命題は、かなり正当性をもって呈示できるだろう。仏教のもつ**普遍的**苦と苦痛の克服の強調と比較すると、キリスト教は苦痛の**ポジティブ**な価値づけを大きな尺度としてきた。すなわち、罪あるもの・罰せられるものとしての人間の指標として、またキリストとともに受難の神秘への同化の尺度として。救済を希求して溜息をつく生き物というこのモチーフは、キリスト教における苦痛が人間中心を方向づけたことは看過できない。そこでは、苦痛の忌避ないしは苦痛の克服は、少なくとも中心的な役割を果たさず、動物の苦痛もまた、モラル的な憤りあるいは現実に注目をあつめる心配の対象とみなされる程度であった。れに加えて、神の写し絵 (imago Dei) という伝統的・人類学的な見方が、悟性に恵まれたものという考え方も相まって、**身体**の苦痛は、その克服を讃えるという連関からも、軽視する傾向が助長された。しかし動物倫理をめぐる粘り強い続く哲学論理が、すなわちジェレミ・ベンサムに始まる動物倫理の強調が、苦しむ能力の側面を前面に押し出した。そのさい、人間中心の合理性基準もまた非難の的となった。たとえばベンサムは、動物について有名な定義をおこなった¹⁹⁾。

問われるべきは、それらが悟性的に**考える**ことができるか、どうかではなく、あるいは、**話す**ことができるかどうか、でもなく、**苦しむ**ことができるかどうか、である。

あまりに思弁的な起源の脱神性テーゼであり、十分に厳密な推進力を得るのは期し難い、との予想からであろうが、今日では、議論は〈地上の主〉の解釈に集中している。それゆえ、この主題に収斂するテキストの当該箇所を手短に見ておくのは無駄ではあるまい²⁰⁾。北米の中世史家²¹⁾マリン・ホワイトがその論考「エコロジカル**クライシス**の歴史的ルーツ」によって、その後洪水のように書物が刊行されるこの分野の口火を切ったのは1966年であった。ホワイトは、聖書に記された創造物の負託と近代の自然破壊が直接的に関係していること

19) Jeremy BENTHAM, *An Introduction*. Kap. XVII, (ed. 1982), 282f.

20) 次の優れた研究を参照, Heike BARANZKE und Hedwig LAMBERTY-ZIELINSKY (1995).

を提起した。そこで検証されたのは、キリスト教・ユダヤ教の一連のまとまった観念であった。脱神性化テーゼのヴァリエーションとしての脱霊性化、ひたすら前方に向かう時間思考の直線性、神の似姿という解釈、そして中心には、支配者負託に由来する行動の歴史がある。中世史家ホワイトから見ると、中世の多様な神学の論説はからみあいながら、近代の宿命的な活動力へつながっていったのだった。

ホワイトのテーゼが、見渡せないほどの議論を惹き起こしたのは、特に「創世記」に関してであった。それに対しては、^{xvi}ゲルハルト・リートケの（批判を含んではいるが）賛成論と並んで、厳しい反論もあらわれた。たとえば^{xvii}ウード・クロルツィク（KROLZIK 1979）は、まことの信仰からの逸脱の結果にほかならないと論じた。しかし地上の主の活動史を一瞥して知られるように、ホワイトのエコロジー解釈は、特殊でもなく、伝統とは無縁などとも言えない。ちなみに「詩篇」第八章5～7節ではこう歌われる。

8:5 あなたは、人を、神よりいくらか劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました。

8:6 あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ、万物を彼の足の下に置かれました。

8:7 すべて、羊も牛も、また、野の獣も

この章句を踏まえて、神の似姿という幅広いコンテクストから引き出されるのが支配者負託であり、それはまた一般的な人間学のメルクマールへと様式化される。そして続いて、人間が事実として無であることが関係づけられる。なぜなら、人間が何でもないおどおどした存在だからであるために、人間はいわば（場合によってはかならずしもささやかではない）刺激を必要とする。

初期の解釈におけるアレゴリー傾向とストア派の美徳理想は、支配者負託を、ふたたび〈自制〉格率の光のなかに現出させた。支配者負託は、人間の自己関係へのイメージあるいはアレゴリーとして解される。自己自身を支配するとは、衝動と情動を操ることである、支配者負託は、同時に内面へと向けられる。ストア学派の宇宙論や人類学において目的論的・目標をめざす思考の圧力の下、〈人間中心的目的論²¹⁾〉が生成した。創造の頂点としての人間はすべての発達を自己に向けさせるが、しかし頂点に立つことは、また強度の自制と自己操縦を喚起する。ここでもまた、あり得べき活動史の成り行きからみれば、アムビヴァレンツを確かめるほかない。一面では、人間は目的論的ヒエラルヒーの頂点をかたちづくる。直接的な志向ではないにせよ、そこには動物を下位に規則づけるとの含意があり、動物はまた動物で、パーフェクトではないにせよ独自の目的論にたずさわって

21) 同上, S.38.

る。もっとも、動物にはそれへの理解つまり神の似姿を思念するという核が欠けている。それは、族長制的・中世的な神学のなかでも解されていたところだった。しかしここでもまた、目的論的な下位規則づけだからとて、少なくとも動物の抑圧や虐待を**必然的**とするわけではない。

もう一面では、人間が宇宙のなかで頂上にあることは、すでに言及した通り、一種の**自己抑制**すなわち**自己統制**においてである。ストア学派の閉鎖的な目的論というかかるコンテキストにおいても（あるいはかかるコンテキストだからこそ）、際限のない自己実現願望や（動物との関わりにおける）過度の軍事的打倒の観念への余地は小さかった。そしてあらゆる人間の支配は神の主権の下にきびしく位置づけられていた。

むしろ、**文化史的には**人類学の自己限定を打破するのは、神が人間をエデンの園において、そこをまもり耕させたことを記す「創世記」の第二章第15節であった。もとより、アウグスチヌスによる**創世記の解釈**（AUGUSTINUS）の影響下ではあったが、働くことは、天上の品位を得ることであった。これは、事実としては、古典古代の全体を背景にして、現実の革新と呼べるものだった。しかしここでもまた、人間の**自由**にすることについては厳しい制限が残っていた。^{xviii}サン・ヴィクトワールのユークの『学習論』におけるように、機械の力学関係が**人間のわざ**（Dienst）に置きなおされて、そのわざが支配者負託にはネガティブな墮罪をふたたび良きものにすることができるのであれば、あらゆる仕事は、創造の秩序を単にもう一度造ることになり、厳密には新しい創造ではないことになる。ずっと後に、カルヴィニズムに刺激された初期資本主義と神学的思念全体に凋落が忍び寄るなかで、多くの人々が聖書の思考に責任を好んで帰せしめるあの展開がはじまった。すなわち、生きることの全ての分野における絶えざるイノベーションという進歩のモデルである。

サブヒューマンな生き物への人間の関係は、いずれにせよ、神の似姿（「創世記」第一章26～28、第五章1, 3節、第六章9b節）の庇護の下で、必ずしも純粹に人間中心の自己呈示として解することができたわけではない。^{xix}ヴァルター・グロースは、人間が神の姿であることについて説得的に限定した²²⁾。

人間が、責任をもって、その生きる世界に、すべての生き物とともにそのなかで行動する限りであり、人間が神にかかわるためにはではない。

神の似姿であることが、生きてあることの表出として、したがって人間の存在論的自己使命として解された後になってはじめて、人間と動物のあいだの原初的な**機能連関**がゆるん

22) Walter GROSS (1981), 261.

できた。働くことと生きることのコンテクストは、人間が神に似ていることを表立たせるためには、存在の質としては退くほかなかった。

ここでの問いにとってひとときわ際立つ旧約聖書のテキストは「コヘレトの言葉（＝伝道の書）」（第三章18～21節）である。ここには、〈人間種主義〉（Speziesismus）、したがって人間の類としての固定が、そうした言い方が発明されるよりもずっと前に、諦念めいた視点から打ち消される²³⁾。

[03:18] 人の子らに関してはわたしはこうつぶやいた。

神が人間を試されるのは、
人間に、自分も動物にすぎないということを見極めさせるためだ、と。

[03:19] 人間に臨むことは動物にも臨むからである。

人間も死に、動物も死ぬ。どちらも同じ霊をもっている。
人間は動物に何らまさるところはない。すべては空しいからである。

[03:20] すべてはひとつのところに行く。

すべては塵から成った。すべては塵に戻る。

[03:21] 人間の霊は上に昇り、

動物の霊は地の下に降ると誰が言えよう。

しかしここでも、現実行動の歴史の面に関心をもって、何らかのテキストの箇所固定するのは、文化史の変容への十分な解明力をもたないと言わなければならない。

聖書の**外在的な**指示は、動物との付き合いでも本質的には融和的であるが、それが**内面的・倫理的な**読解をゆるし、しかも個々の点では動物倫理の**根拠になり得ていない**。ゲルハルト・リートケが〈環境聖書主義〉²⁴⁾に警告を発しているのは、もともとである。しかし「コヘレトの言葉」のテキストは、先入観と自明性を深く真剣に問い直すことを促している。とりわけ、このテキストの光の下、〈造られたもの〉が内面的に何と捉えられているかは明らかである。一口に言えば、人間のラディカルな終末認識である。動物がいることとないこと、それは人間にとって、それぞれ、慰めの近しさを、あるいは孤独をやめることを意味している。しかしそうした解釈もまた、聖書そのものの動物倫理に依拠できるわけではない。イエスは、動物の保護者ではなく、動物倫理家でもなかった。聖書の

23) 参照、Wolf-Rüdiger SCHMIDT (1982), 9.

24) Gerhard LIEDKE (1993), 213.

記述は、この点では、ほとんど全ての問題についてと同じく、多義的である²⁵⁾。

罪あるものを想定するにせよ、手つかずの無辜を推測にするにせよ、エコロジーや動物倫理については舌足らずであるため、聖書のテキストは用いるのに十分なものではない。そのさい、**今日**なら、特に創造にかかわる神学論議は、動物倫理という**特殊な**議論から区分しなければならない。**地上の主** (dominum terrae) と**神の似姿** (imago dei) との関わりでみられる人間についての発言と動物をめぐる発言のあいだにみられる聖書の記述の近しさも、ここでは、動物倫理という特殊な情報を期待するのには無理がある。^{xx}ミヒアエル・ヴェルカーは、論争的かつ組織神学の冷静な成果をその点に絞った²⁶⁾。

支配者負託に課せられるのは、人間と動物をともに〈養う世界〉における生命を、異なった力の落差に応じた違いに即して秩序づけることである。それは一面では、共通の位相のもとでの隣人関係かつ共生関係である。と共に他面で明白かつ紛れもないのは、奴隷や従属民とのアナロジーからも分かるように、動物は人間に従属する下位の生き物である。……この言い方は、人間のあいだに落差が存する以上、明快そのものである。動物が人間の上位に位置することは決してあり得ない。それは絶対に排除されよう。しかし同時に、人間と動物が養いと利害の共同体にあることも重要である。旧約聖書の法令集では奴隷にはわずかな権利しか認められていないのと同じく、また敗れた他民族は通常は使役されはするが、抹殺には至らないのと等しく、人間の動物に対する関係は、寛容と扶養の関係であり、また独自かつ本来的な利害の意味においてもそうである。

ヴェルカーは、ここで、動物倫理であればどうであれ留意すべき二つの中心的なカテゴリーを挙げているが、それらは聖書が十分に記述しているとはとうてい言えないものでもある。すなわち動物の〈利害〉と動物の〈権利〉である。

創世神学の議論と帰結として登場したのは、一連の語彙、すなわち神学では新しいものであるエコ・セマンティック (環境意味論) である。〈バイオテック創世責任〉^(xxi)ヴォルフガング・ネートヘーフェル) が語られ、また〈創世への責任〉が〈イエス・クリストへの責任〉として説かれ、後者はまた動物に焦点を合わせた〈イエス・クリスト存在の内的推移とそれへの参与〉(チャールズ・ウェスト)²⁷⁾へと延びてゆく。

エコロジーの議論は、神学を、〈創世〉のテーマへ戻したと言ってもよい²⁸⁾。自然科学全

25) Michael BLANKE, *War Jesus ein Tierschützer?* (1991).

26) Michael WELKER (1995), 102.

27) Ch. C. WEST (1985), 158.

28) 参照, Ch. LINK (1981).

体の発展が、また特殊には宇宙物理学の理論形成が、創世に関する教義をなぎ倒した後、エコロジーが、創世教義を思い返す上で意味多く歓迎すべきと機縁となっている。〈創造されたものの正当性と平和との保全〉への運動は、こうして向けられた注意の重要な産物であった²⁹⁾。

それゆえ、^{xxii}ユルゲン・モルトマンはその『エコロジーから見た創世教義』において、〈神の似姿〉の観念ではなく、むしろ安息に聖書の黎明史の作用域を指摘した³⁰⁾。

聖書によるこの神中心の世界像は、人間と宇宙のなかでのその特殊な位置にたいして、創世共同体の一員として自己を解する可能性をあたえてくれる。

とは言え、筆者の憂慮を言うなら、創世への信仰を〈あの近代の人間中心の世界観³¹⁾から解き放つのは、決して〈自然との付き合いにおける智慧〉に還元することはできない。

とりわけ〈人間中心主義〉の概念は、しばしば贖罪の牡羊に仕立てられてきた。(人間中心主義は)〈自然から魂をうばいとり、人間を肉体なき主体とした³²⁾〉というのである。ここで簡単に診断されることがが実際には何であるかは、高度な水準での説明を要しよう。そもそも、〈魂をうぼう〉とは何を指すのであろうか。さらに、聖書解釈学からのナイーヴ性に乗ぜられない場合には、人間中心主義から逃れられるのであろうか³³⁾。それによって、認識論的に不可避の人間中心主義と規範的な人間中心主義のあいだは、分割できるのであろうか。認識と理解は常に人間中心主義的であり、それに対して、価値づけと評価は、単なる主観性と公共のエゴイズムの局面から脱け出してしまいうだろう。

その点では、〈族長主義の考えかたを説く^{xxiii}ペーター・ザラディーンとクリストーフ・ツェンガーも親近である。人間に屢々寄せられてきた〈平和の審判者〉の役割も生彩を欠いたままである。創世に発する〈権利共同体〉あるいは〈独自の権利をもつ生き物³⁴⁾〉として動物をあつかうことへの弁論、すなわち宿命的で法倫理的なパースペクティヴは、これまた拘束神学的な根拠づけの上に打ち建てられるわけではない。その定義が称賛すべき意図によるとは言え、多くは、レトリック的な試行にとどまっている (^{xxiv}ハンス・ケスラー、^{xxv}ゲルト・フォン・ヴァーレルト、^{xxvi}フィリップ・シュミッツなど)。その点で、

29) 参照, Lukas VISCHER.

30) Jürgen MOLTSMANN (1985), 35.

31) これらの差異については次を参照, Alfons AUER (1984), 203ff.; また次をも参照, Sigurd DAECKE (1989).

32) Jürgen MOLTSMANN / Elisabeth GIESSER (Evang. Theol., 50.Jg., Heft 5), 443.

33) プライテンバッハは、〈哲学の側からはほとんど期待できない〉(BREYTENBACH 1990, 343) のに対して、神学では多岐にわたる高水準の議論が行なわれていて、哲学を凌ぐところがあると指摘している。

34) Jürgen MOLTSMANN (1989), 91.

伝統的な創世教義は（エコロジーの衣をまとう場合でも）、目的論哲学の喪失を今なお回復してはいない、という^{xxvii}フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフの指摘は的を射ている³⁵⁾。目的論に代わって、モラルが、厳格な没存在論あるいは道德教義の形をとって、創世を我がものにしつつある、と言うこともできないではない。しかしこの道をたどると、そうした神学の省察は、前近代の説明モデルにたやすく逆戻りしてしまう。〈創世教義が、新たな原理主義倫理の拘束構造に〉³⁶⁾なってしまうなら、その教義は、（そのもちいるメタファーの生物学的かつ倫理的な妥当性を証明することができなければ）信心の原理主義に陥るほかない³⁷⁾。ちなみにそうした自製の先行者は^{xxviii}カール・バルトであった。バルトは、創世の教義をもっぱら〈信仰のことがら〉と解することをめざしたのである³⁸⁾。また、そもそもの力の衝突、すなわちエコノミーとエコロジーの優先権をめぐる確執に神学のヴェールをかぶせることに、明快に警告を發したのは^{xxix}ヴォルフガング・フーバーであった³⁹⁾。

しかし動物倫理の諸々の問いは、創世神学のグローバルな諸概念でもとらえきれない。神学の伝統のなかでは、動物は特に救済論の（言い換えれば救済実践の）パースペクティブのなかに置かれることが多く（たとえば^{xxx}エックハルト・ヘンシャイトの論説が見せるイロニーにおいても、そうした思弁的な問いを取り上げられたときにはある種の真剣さがあることがうかがえる⁴⁰⁾、したがって祝禱の対象となることができたのだったが⁴¹⁾、今日では神学のなかでの動物倫理の議論も法倫理の面での根拠づけに向かっている。とは言え、見誤るのは禁物だが、1986年の動物保護法の第一条においても、〈同類〉というターミノロジーは、神学による根拠づけを直接的に必要としているわけではない。ここで生き続けているのは、聖書にちなんだ着想された意味論と言うにすぎない。またそうしたものとして、神学的な意味をそなえてはいるが、その意味論は、外面的にも倫理的な性格にあるわけではない⁴²⁾。

^{xxxi}アンドリュー・リンゼイは論文『動物のもつ神の権利』のなかで、一見して聖書から引き出されたことが分かるようなかたちで動物の権利の根拠を提示した。すなわち、動

35) F. W. GRAF (1990), 213.; 同じく問題のあることは、スーパーマンの神学再生の試み (R. SPAEMANN, 1989) についても言い得よう。

36) F. W. GRAF (1990), 216.

37) 参照, W. HÄRLE (1995), 428ff.; エコロジー創世議論への同じ批判的コメントはフライにもみとめられる。参照, Ch. FREY (1987), 212ff.

38) K. BARTH, *Die Kirchliche Dogmatik III / I.* (1945), 1ff.

39) W. HUBER (1987), 239.; なおハンス・イムラーを参照, H. IMMLER (1989).

40) 参照, E. HENSCHIED (1995).

41) 参照, Major C. W. HUME (3.ed. 1980).

42) 参照, U. DAHLKE (1993).

物が〈固有の価値〉を有するのは、神が動物にも（したがって人間に向けてだけでなく）権利関係を指定したからである、とし、またそこに由来する動物の権利に、人間は敬意を払わなければならない⁴³⁾、と言う。それゆえまたリンゼイは創造教義に法倫理的な解釈をほどこすが、だからと言って創造者と被造物の間の関係が権利関係として解することがいかなる意味をもつかを問うてはいない。いずれにせよ、この点では倫理的な中間テキストがもとめられよう。存在者がどのようにして権利をもつのかについて、リンゼイは、能力あるいはキャパシティを組み込んだかたちで解答しようとはしない。後者の解答であれば〈人間中心主義的〉になるだろうが、それに対してリンゼイの観点は〈動物中心主義的〉と言ってもよい⁴⁴⁾。権利をめぐるリンゼイの推論には信仰至上主義の原理の面で疑問が起きる。もし私たちが生き物一般に権利をみとめている論拠が自明でないなら、どうして神が動物に権利をあたえたことを信じるべきということになるだろうか。動物倫理の考察が、他ならぬ神学の文脈においても必要とするのは、正にリンゼイが疎かにしてしまった根拠づけである。すなわち能力を組み込んだ理論整理である。そうした批判理論的な整理を欠いては、権利に至るのはどのようにしてであるか、また権利を付与し認める上での段階とはどうあることができるのかといった問題はあいまいなままである。また^{xxxii}イエルク・ライムバッハーの〈神の地上に対する神の権利留保〉あるいは〈被造物の尊厳の概念⁴⁵⁾〉も、どのようにしてそれらが神の権利 vs 人間の権利、あるいは神の時間 vs 人間の時間という対立のなかに位置づけられるのかが不明確である。なぜなら、〈私たちのプランニングの時間尺度〉（これをライムバッハーは拒否したのだったが）に立つのであれば、神によって定められた時間を、創造の未来地平として妥当なものとするには如何になすべきであろうか、との疑問が起きるからである。私たち（人間）の時間尺度を倫理尺度に服するものであるとみなすことによって、神の被造物に対する神の時間尺度を違ったふう解するのは適切だろうか。創世神学の諸問題が具体的となるのは、諸問題が発見法の観点から倫理的な手直しの意味地平として解釈されるときであろう。それらの諸問題それ自体は、（本質的にコミュニケーション能力に根差す）倫理的な根拠づけを代替することはできない。またそれ以外のすべては、たしかに意図はよいとしても、パトスとレトリックにとどまる恐れがある（これは^{xxxiii}ゲッツ・リュンプラーや^{xxxiv}エーリッヒ・グレーサー、オイゲン・ドレーヴァーマンの諸氏が指摘するところである。参照， RUEMPLER, GRÄSSER, DREWERMANN)。

先にふれたように、(神学の)動物倫理は、暗喩による漠然とした根拠づけですむことで

43) A. LINZEY (1987), 69.

44) 同上, 76.

45) Jörg LEIMBACHER (Evang. Theol., 50.Jg., Heft 5), 460f.

はない。たとえば、魂が〈生命の言うにいわれぬ複合性への暗号〉と評されるなら、すなわち〈すべての種類の生命への畏怖や畏敬、いふなれば神秘として観想・共鳴を得るとするなら〉、かかる倫理的意味表には、経験確認性あるいはインデックスとしての基盤が見えるようになければならない。そのため、^{xxxv}アードルフ・ポルトマンに続いて、ヴォルフ＝リュウディガー・シュミットも、こう自問する⁴⁶⁾。

靈魂問題は古くからのものではあるが、今日なら、豊かな内面性や喜んだりじゃれたりする能力を問う以上に、動物の痛み・苦しみへの感受性が取り上げられるべきではなからうか。

シュミットは、動物問題を秘境的な聖域へ押し上げる^{xxxvi}オイゲン・ドレーヴァーマンののぼせ上がった見方を斥ける。ドレーヴァーマンは、動物倫理の根本は動物の不死性への信仰にあるとまで言うのである⁴⁷⁾。倫理をめぐるそうした根拠づけの破壊的なまでの一辺倒な理屈は問題外であり、むしろ大きな意味をもつのは〈靈性の〉視点と〈モラルの〉規準との区別であろう⁴⁸⁾。神学の動物倫理では、*経験確認的*規準が明示されるか、取り上げるかでないからではない。

^{xxxvii}アルベルト・シュヴァイツァーは、決して聖書原理主義的な信仰倫理の人ではないが、次のような定義を行なっている⁴⁹⁾。

倫理は、生きようとするすべての意志に、自己がもつその意志に対するのと同じ畏敬をもつこと、それを止むに止まれぬものを私が感じとることに存する。

シュヴァイツァーは、同情倫理の要素やショーペンハウアーの思弁哲学、さらに生の哲学から影響を受けたとしているが、根源にはむしろ現象学がひそんでいる⁵⁰⁾。

倫理とは、私と私以外の者のなかにある生きる意志への畏敬である。私のなかの生きる意志への畏敬があってはじめて生きることへの深い肯定としての抑制の念が生まれてくる。私は、私の生きようとする私の意志を、幸運によって生き延び得たものとしてではなく、自ら生きること確かめるものとしても了解する。私は、この自分で生きること

46) Wolf-Rüdiger SCHMIDT (1982), 30.

47) DREWERMANN (1990).

48) 参照、LINZEY, *Animals and Moral Theology* (1979).

49) Albert SCHWEITZER (1960), 331.

50) 同上, 225f.

を記憶から消えてゆくのに任せず、貴重なものとして感得することに意を用いる。かくして精神的な自己主張の秘密が私のなかに沸き起こる。生きるという運命から不意に自由になることも起きる。……抑制の念は、私たちが倫理へと入ってゆくにあたっての殿堂である。**生きようとする自己の意志に深く身を捧げるなかで、諸々の出来事から内的に自由になることを噛みしめる者だけが、深甚かつ恒常的に他者が生きることへの讃仰をなし得るのである。**(強調体は原文)

シュヴァイツァーのこの深甚な思索こそ、神学的倫理の起点になるであろう。そして哲学理論に密着し、また動物行動学の知見を共にすることによって、それはさらに展開できるものとなる。

神学の脈絡における動物倫理の考察は、たとい人間中心主義の立脚点をどれほどラディカルに避けようとしても、詰まるところ、すべて人間中心のパースペクティブから議論することになる。その地平は、人間を生物進化の(これまでのところは)頂点に位置づける段階論に接近する。たとい動物に原初モラルを認めたとしても、動物は道徳をめぐる省察能力を揮うことができるわけではない。それゆえ、義務を洞察する(人間の)能力にもとづいて、動物が私たち人間とのモラル関係に入ってくるのが当を得ていよう。とは言え、この原理的な不均衡は、動物に対する人間の責任を**高めはしても**、軽減することはない。しかし人間の権利と動物の権利の同等可能性や平等をめぐる問いでは、哲学の側からの倫理考察にあってもさらに細かな検討を要しよう。小児ですら、省察能力と道徳的な思索する能力をそなえた人間となる潜在力をそなえており、大人の類人猿あるいはイルカとは根本的に異なったものと見るべきであろう。もとよりこの点に考慮したとしても、問題全体を厳密に把握し構造化するには程遠い。とは言え、それはここでの課題ではない。

キリスト教神学が創世倫理的な大目標に挑むにあたっては、たとい良き意図に発してはいても、神学の**正面からのものではない**倫理的テーゼに対して直接的に神学的な根拠づけをめざしていることを批判的に自覚しなければならない。根拠づけには、エコロジーの立場からの警告も重なって、生き物への原理主義的な見解も培われてはきたが、地域文化のなかで世界観的な指定を行なうのは、倫理をめぐる確執を取り除くのに適さない。神学は、議論仮説を引きずる危険をおかしたくなければ、**倫理的な論議の精度を高めなければ**ならない。

参考文献

- AQUINO, Thomas von, *Summa theologiae*. Madrid 1951.
 ARISTOTELES, *De anima*. Zürich 1950.
 AUER, Alfons, *Umweltethik. Ein theologischer Beitrag zur ökologischen Diskussion*. Düsseldorf 1984.

- AUGUSTINUS, Aurelius, *De Genesi ad Litteram*. Paderborn 1961 / 64.
- AUSTIN, Jack, *Buddhist Attitudes Towards Animal Life*. In: PATERSON / RYDER (1979), 25–33.
- BABEL, Isaak, *Tagebuch 1920*. Berlin 1990.
- BARANZKE, Heike, *Rezension zu: M. SCHLITT, Umweltethik*. In: Phil. Lit. Anzeiger, Bd.46, Heft 4, Oktober–November 1993, 366–370.
- DIES./ LAMBERTY-ZIELINSKI, H., *Lynn White und das dominum terrae (Gen.I, 28b). Ein Beitrag zu einer doppelten Wirkungsgeschichte*. In: BN (1995), 32–61.
- DIES., *Rezension zu: J.-C. WOLF, Tierethik*. In: Phil. Lit. Anzeiger, Bd.48, Heft 1, Januar–März 1995, 22–25.
- BARTH, Karl, *Die Kirchliche Dogmatik III / 1*. Zollikon 1945.
- BENTHAM, Jeremy, *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*, ed. By J. H. BURNS and H. L. A. HART, London 1982.
- BERNHARDT, Joseph, *Die unbeweinte Kreatur. Reflexionen über das Tier*. München 1987.
- BIRNBACHER, Dieter, *Mensch und Natur. Grundzüge der ökologischen Ethik*. In: Kurt BAYERTZ (Hg.), *Praktische Philosophie. Grundorientierungen angewandter Ethik*. Reinbek 1954, 279–321.
- DERS., *Sind wir für die Natur verantwortlich?* In: DERS. (Hg.), *Ökologie und Ethik*. Stuttgart 1986, 103–139.
- BLANKE, Christa, *Das Tier als Bruder. — Sind Tiere wichtiger als ich? — Bin ich schuldig geworden?* In: RÖHRICH (1992), 108–114.
- BLANKE, Michael, *War Jesus ein Tierschützer?* In: Wolf-Rüdiger SCHMIDT (1991), 108–121.
- DERS., *Was macht der Esel in der Kirche? Erfahrungen mit „Tiergottesdiensten“*. In: Wolf-Rüdiger SCHMIDT (1991), 123–127.
- BONDOLFI, Alberto, *Mensch und Tier. Ethische Aspekte ihres Verhältnisses*. Freiburg i.Ue. 1994.
- BOSELDMANN, K., *Im Namen der Natur. Der Weg zum ökologischen Rechtsstaat*. Bern / München / Wien 1992.
- BREYTENBACH, Cillers, *Glaube an den Schöpfer und Tierschutz. Randbemerkungen zu Albert Schweitzers Ethik angesichts urchristlicher Bekenntnissätze und Doxologien*. In: *Evang. Theol.*, Jg.50, 1990, 343–356.
- CARRUTHERS, Peter, *The Animals Issue. Moral Theory in Practice*. Cambridge 1992.
- DAECKE, Sigurd, *Anthropozentrik oder Eigenwert der Natur?* In: Günther ALTNER (Hg.), *Ökologische Theologie. Perspektiven zur Orientierung*. Stuttgart 1989, 277–299.
- DAHLKE, Ulrike, *Zum theologischen Hintergrund des Begriffs „Mitgeschöpf“ in Paragraph 1 des Tierschutzgesetzes*. Gießen 1993.
- DARWIN, Charles, *The Expression of the Emotions in Man and Animals* (1872), Reprint, Chicago / London 1965.
- DAWKINS, Marian Stamp, *Animal Suffering. The Science of Animal Welfare*. London / New York 1980.
- DEKKERS, Midas, *Geliebtes Tier. Die Geschichte einer innigen Beziehung*. München / Wien 1994.
- DREWERMANN, Eugne, *Über die Unsterblichkeit der Tiere: Hoffnung für die leidende Kreatur*. Olten-Freiburg 1990.
- DERS., *Versöhnung zwischen Mensch und Tier?* In: RÖHRICH (1992), 103–107.
- FEINBERG, Joel, *Die Rechte der Tiere und zukünftiger Generationen*. In: D. BIRNBACHER (1980), 140–179.
- FOX, Michael W., *Animal Rights Nature Liberation*. In: PATERSON / RYDER (1979), 488–472.
- FRANK, Manfred, *Ist Selbstbewußtsein ein propositionales Wissen?* In: DERS., *Selbstbewußtsein und Selbsterkenntnis. Essays zur analytischen Philosophie der Subjektivität*. Stuttgart 1991, 206–251.
- FRANKENA, Wilhelm K., *Das Recht auf Leben von nicht-menschlichen Wesen*. In: A. BONDOLFI (Hg.), *Mensch und Tier*. Freiburg i.Ue. 1994, 117–137.
- DERS., *Ethics and the Environment*. In: GOODPASTER (1979), 3–20.
- FREY, Christoph, *Dogmatik. Ein Studienbuch*. Gütersloh 1987.
- DERS., *Theologie und Ethik der Schöpfung. Ein Überblick. Heinz Eduard Tödt zum 70. Geburtstag*. In: ZEE, 32.Jg. (1988).
- FREY, Raymond Gillespie, *Interests and Rights. The Case Against Animals, (Tier als Bruder. — Sind Tiere wichtiger als ich? — Bin ich schuldig geworden?)*. Oxford 1980.
- GOODPASTER, Kenneth E. and SAYRE, Kenneth M., *Ethics and Problems of the 21st Century*. Notre Dame / London

- 1979.
- GRAF, Friedrich Wilhelm, *Von der creatio ex nihilo zur „Bewahrung der Schöpfung“*. *Dogmatische Erwägungen zur Frage nach einer möglichen ethischen Relevanz der Schöpfungslehre*. In: ZfThK 87.Jg. (1990), 206–223.
- GRÄSSER, Erich, *Ehrfurcht vor dem Leben*. In: RÖHRICH (1992), 92–102.
- DERS., *Zum Thema Tierversuch. Erwägungen aus der Sicht einer theologischen Ethik*. In: Pastraltheologie 72.Jg. (1983), 466–478.
- GRIFFIN, Donald R(edfield), *The Question of Animal Awareness: evolutionary continuity of mental experience*. New York 1976. 桑原万寿太郎 (訳) 『動物に心があるか：心的体験の進化的連続性』岩波書店, 1979.
- GROSS, Walter, *Die Gottesebenbildlichkeit des Menschen im Kontext der Priesterschrift*. In: ThQ, 161.Jg. (1981), S.244–264.
- HARLE, Wilfried, *Dogmatik*. Berlin / New York 1995.
- HEINE, Günther, *Ökologie und Recht in historischer Sicht*. In: LÜBBE / STRÖKER (1986), 116–134.
- HENSCH, Eckard, *Welche Tiere und warum das Himmelsreich erlangen können. Neue theologische Studien*. Stuttgart 1995.
- HÖFFE, Otfried, *Der wissenschaftliche Tierversuch: eine bioethische Fallstudie*. In: E. STRÖKER (Hg.), *Ethik der Wissenschaften? Philosophische Fragen*. Paderborn 1984, 117–150.
- HOFFMANNSTAHL, Hugo von, *Ein Brief*. In: DERS., *Erzählungen, Erfundene Gespräche und Briefe. Reisen, Gesammelte Werke VII*, hg.von B. SCHÖLLER. Frankfurt a.Main 1986, 461–472.
- HUBER, Wolfgang, „Nur wer die Schöpfung liebt, kann sie retten“. *Naturzerstörung und Schöpfungsglaube*. In: Gerhard RAU u.a. (Hg.), *Frieden in der Schöpfung. Das Naturverständnis protestantischer Ökologie*. Gütersloh 1987, 229–248.
- HUME, Major C. W., *The Status of Animals in the Christian Religion*. Herts (3.ed.) 1980.
- IMMLER, Hans, *Vom Wert der Natur*. Opladen 1989.
- KANT, Immanuel, *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten* (1785). (ed. Phil. Bibl. 42). Hamburg 1966.
- KAPLAN, Helmut F., *Warum Vegetarier? Grundlangen einer universalen Ethik*. Frankfurt a.M. / Bern 1989.
- KESSLER, Hans, *Das Stöhnen der Natur. Plädoyer für eine Schöpfungsspiritualität und Schöpfungsethik*. Düsseldorf 1986.
- KIRCHHOFF, Hermann, *Sympathie für das Tier. Mensch und Tier in biblischer Sicht*. München 1987.
- KRIJNEN, C. H., *Haben Tiere Rechte?* In: ARSP, Vol. 83 (1997), Heft 3, S.369–396.
- KROLZIK, Udo, *Umweltkrise — Folge es Christentums?* Stuttgart / Berlin 1979.
- LEAHY, Michael P. T., *Against Liberation. Putting Animals in Perspective*. London / New York 1991.
- LEIMBACHER, Jörg, *Die Rechte der Natur*. In: Evang. Theol., 50.Jg., Heft 5, 450–559.
- LENK, Hans, *Gibt es moralische Quasirechte der Natur?* In: DERS., *Mitternachtssonnenwende. Ein ökologisch-philosophisches Nordlandreisetagebuch*. Stuttgart 1992, 103–137.
- LIEDKE, Gerhard, „Tier-Ethik“ — *Biblische Perspektiven*. In: ZfEvE, 29.Jg. (1985), 161–171.
- DERS., „Tier-Ethik“ — *Biblische Perspektiven. Ein Bericht*. In: Bernd JANOWSKI u.a. (Hg.), *Gefährten und Feinde des Menschen. Das Tier in der Lebenswelt des alten Israel*. Neukirchen 1993, 199–218.
- LINK, Christian, *La crise écologique et l'éthique théologique*. In: Revue d'histoire et de philosophie religieuse, Band 61 (1981), 147–160.
- LINZEY, Andrew, *Christianity and the Rights of Animals*. New York 1987.
- DERS., *Animals and Moral Theology*. In: PATERSOHN / RYDER (1979), 34–42.
- LÜBBE, Hermann / STRÖKER, Elisabeth (Hg.), *Ökologische Probleme im kulturellen Wandel*. (Reihe: Ethik der Wissenschaften Bd.5.). München / Paderborn 1986.
- MARQUARD, Odo, *Eine liebe Lebensphilosophie*. In: LÜBBE / STRÖKER (1986), 109–112.
- MASSON, Jeffrey M. / MACCARTHY, Susan, *Wenn Tiere weinen*. Reinbek 1995.
- MELLE, Ulrich, *Tiere in der Ethik. Die Frage nach der Grenze der moralischen Gemeinschaft*. In: ZfPhF Band 42 (1988), 247–273.
- MEYER-ABICH, Klaus M., *Dreißig Thesen zu Praktischen Naturphilosophie*. In: LÜBBE / STRÖKER (1986), 100–108.

- DERS., *Eigenwert der natürlichen Mitwelt und Rechtsgemeinschaft der Natur*. In: Günther ALTNER (Hg.), *Ökologische Theologie. Perspektiven zur Orientierung*. Stuttgart 1989, 254–276.
- MOLTMANN, Jürgen, *Gerechtigkeit schafft Zukunft. Friedenspolitik und Schöpfungsethik in einer bedrohten Welt*. Stuttgart / Mainz 1989.
- DERS., *Gott in der Schöpfung. Ökologische Schöpfungslehre*. Stuttgart 1985.
- DERS. / GIESSER, Elisabeth, *Menschenrechte, Rechte der Menschheit und Rechte der Natur*. In: *Evang. Theol.*, 50.Jg., Heft 5, 437–444.
- DERS. (Hg.), *Versöhnung mit der Natur?* Stuttgart 1986.
- MONTAIGNE, Michel de, *Essays*. Ausgabe Herberth Lüthy. Zürich 1953.
- NETHÖFEL, Wolfgang, *Biotechnik zwischen Schöpfungsglauben und schöpferischem Handeln*. In: *Evang. Theol.*, 49.Jg., Heft 2, 179–199.
- OELMÜLLER, Willi, *Für eine Ökologiediskussion diesseits von Systemdenken und Moralismus*. In: LÜBBE / STRÖKER (1986), 113–115.
- ORIGENES, *Contra Celsum*. GSC, Opera I und II:
- OTT, Konrad, *Ökologie und Ethik. Ein Versuch praktischer Philosophie*. Tübingen 1993.
- PATERON, David / RYDER, Richard D. (ed.), *Animals/ Rights — a Symposium*. London 1979.
- RAMBECK, Bernhard, *Mythos Tierversuch*. In: RÖHRICH (1992), 80–86.
- RACHELS, James, *Created from Animals. The Moral Implications of Darwinism*. Oxford / New York 1990.
- DERS., *Do Animals Have a Right to Liberty?* In: REGAN / SINGER 1976, 205–223.
- REGAN, Tom, *All that Dwell therein. Animal Rights and Environmental Ethics*. Berkeley / Los Angeles / London 1982.
- RICKABY, Joseph, *Of the So-called Rights of Animals*. In: REGAN / SINGER 1976, 179–180.
- RITCHIE, D. G., *Why Animals Do Not Have Rights*. In: REGAN / SINGER 1976, 181–189.
- ROCK, Martin, *Theologie der Natur und ihre anthropologisch-ethischen Konsequenzen*. In: BIRNBACHER (1986), 72–102.
- RODD, Rosemary, *Biology, Ethics and Animals*. Oxford 1990.
- RÖCKEN, Hermann, *Das Geschöpf Tier und wir*. Kempfenhausen 1985.
- RÖHRIG, Eberhard (Hg.), *Der Gerechte erbarmt sich seines Viehs. Stimmen zur Mitgeschöpflichkeit*. Neukirchen-Vluyn 1992.
- ROLLING, Bernhard E., *Animal Rights and Human Morality*. New York 1992.
- ROUTLEY, R. and V., *Against the Inevitability of Human Chauvinism*. In: GOODPASTER / SAYRE (1994), 36–59.
- RUH, Hans, *Tierrechte — neue Fragen der Tierethik. Literaturbericht*. In: ZEE 33 (1989), 59–71.
- RUEMPLER, Götz, *Sklaven oder Mitbrüder? Unser Verhältnis zu den Tieren*. In: RÖHRIG (1992), 57–64.
- SALADIN, Peter / ZENGER, Christoph, *Rechte künftiger Generationen*. In: *Evang. Theol.*, 50.Jg., Heft 5, 444–450.
- SALT, Henry S., *Animals Rights* (1892). Pennsylvania 1980.
- SCHMIDT, Wolf-Rüdiger, *Leben ohne Seele? Das Elend der Tiere und die Religion*. In: DERS. (1982), 9–57.
- DERS., *Leben ohne Seele? Tier — Religion — Ethik*. Gütersloh 1991.
- SCHMITZ, Philipp, *Ist die Schöpfung noch zu retten? Umweltkrise und christliche Verantwortung*. In: Würzburg 1985.
- SCHOPENHAUER, Arthur, *Über die Grundlage der Moral*. In: DERS., *Kleine Schriften II*. Zürich 1977.
- SCHWEITZER, Albert, *Kultur und Ethik*. München 1960.
- SCHWERDTFEGGER, Fritz, *Autökologie (Bd.1), Demökologie (Bd.2), Synökologie (Bd.3)*. Hamburg / Berlin 1963 / 1968 / 1975.
- SERPEN, J., *In the Company of Animals. A Study of Human-Animal Relationships*. Cambridge 1996.
- SINGER, Peter, *Befreiung der Tiere. Eine neue Ethik zur Behandlung der Tiere*. München 1982.
- DERS., *Not for Humans Only: The Place of Nonhumans in Environmental Issues*. In: GOODPASTER / SAYRE (1994), 191–206.
- DERS., *Praktische Ethik* (Neuausgabe). Stuttgart 1994.
- DERS., *Rethinking Life and Death. The Collapse of Our traditional Ethics*. Melbourne 1994.

- SKRIVER, Carl Anders, *Der Verrat der Kirchen an den Tieren*. München 1967.
- SPAEMANN, Robert, *Glück und Wohlwollen. Versuch über Ethik*. Stuttgart 1989.
- DERS., *Technische Eingriffe in die Natur als Problem politischer Ethik*. In: BIRNBACHER (1986), 180–207.
- DERS. / LÖW, Reinhard, *Die Frage Wozu? Geschichte und Wiederentdeckung des theologischen Denkens*. München 1981.
- SPINOZA, Baruf de, *Die Ethik nach geometrischer Methode dargestellt*. Hamburg 1976.
- STEFFAHN, Harald, *Menschlichkeit beginnt beim Tier*. Stuttgart 1987.
- STIER, Friedolin, *Vielleicht ist irgendwo Tag. Aufzeichnungen*. Freiburg / Heidelberg 1981.
- STONE, Christoph D., *Umwelt vor Gericht. Die Eigenrechte der Natur*. Darmstadt 1992.
- STUTZIN, Godofredo, *Die Natur der Rechte und die Rechte der Natur*. In: Rechtstheorie, 11. Band 1980, 344–255.
- TEUTSCH, Gotthard M., *Da Tiere eine Seele haben ...* Stuttgart 1987.
- DERS., *Lexikon der Umwelthethik*. Göttingen / Düsseldorf 1985.
- DERS., *Mensch und Tier. Lexikon der Tierschutzethik*. Göttingen 1987.
- DERS., *Soziologie und Ethik der Lebewesen. Eine Materialsammlung*. Bern / Frankfurt a.M. 1975.
- TURNBULL, E., *Animals and Moral Theology (2)*. In: PATERSON / RYDER (1979), 43–47.
- VISCHER, Lukas, *Rolle und Beitrag der Kirchen*. In: Evang. Theol., 50. Jg., Heft 5, 467–472.
- WAHLERT, Gerd von, *Verantwortung für die Schöpfung. Berichte aus der Umwelt- und Entwicklungsarbeit*. Stuttgart 1987.
- WARNACK, G. J., *The Object of Morality*. London 1971.
- WEIBEL, Ewald R., *Der ethische Konflikt des Tierversuchs*. In: ZfEvE 29. Jg. (1985), 147–189.
- WELKER, Michael, *Schöpfung und Wirklichkeit*. Neukirchen 1995.
- WEST, Charles C[onverse], *Verantwortung für die Schöpfung*. In: ZfEvE 29. Jg. (1985), 174–159.
- WILMS, Franz-Elmar, *Das Tier: Mitgeschöpf, Gott oder Dämon*. Frankfurt a.M. / Bern / New York / Paris 1987.
- WILS, Jean-Pierre, *Verletzung und Integrität. Zur Transformation und ästhetischen Rehabilitation der Teleologie*. In: DERS. (Hg.), *Natur als Erinnerung. Annäherung an eine müde Diva*. Tübingen 1992, 111–158.
- WOLF, Jean-Claude, *Neuerscheinungen zur Tierethik*. In: Philosophische Rundschau, 40. Jg. (1993), 129–141.
- DERS., *Tierethik. Neue Perspektiven für Menschen und Tiere*. Freiburg i. Ue. 1992.
- DERS., *Tierrechte — neue Fragen der Tierethik. Kritische Anmerkungen zum Literaturbericht von Hans Ruh (ZEE 33, 1989, 59–71)*. In: ebd. 301–305.
- WOLF, Ursula, *Das Tier in der Moral*. Frankfurt a.M. 1990.
- DIES., *Haben wir moralische Verpflichtungen gegen Tiere?* In: ZfPhE 542 Badn (1988), 222–246.

訳注

- i (407) カール・アンダース・スクリーヴァー (Carl Anders Skriver 1903-83) ハムブルクに生まれた牧師・菜食主義と動物敬愛運動の活動家。十七歳のときに釈尊の教えを知ってヴェジタリアンとなり、ハムブルク、マールブルク、チュービンゲンの諸大学で法学・哲学・神学を学び、「ヴェーダ文献に見る創世の理念」(*Die Idee der Schöpfung in der vedischen Literatur*)で学位を得た。1933年にルター派の司牧者となり、北フリースラントの小都市オックホルム (Ockholm) の牧師となった。ナチズムにはナチスの政権獲得以前から批判的で、1943年に秘密警察に逮捕され、釈放されたが居所を制限され監視下におかれた。戦後も司牧を続け、1952年から1958年まではホルシュタインの小村プロンストルフ (Pronstorf) で牧師をつとめ、以後は著述活動に入った。『動物に対する教会の裏切り』(*Verrat der Kirchen an den Tieren*. 1967)、『イエスと最初のキリスト者たちの生き方』(*Die Lebensweise Jesu und der ersten Christen*. 1973)、『忘れられた始原：創世とキリスト教』(*Die vergessenen Anfänge der Schöpfung und des Christentums*. 1977)の3著は反響を呼んだ。夫人ヒルデガルトも思想を同じくする活動家であった。今日も、スクリーヴァーの名前を冠した団体が活動を続けている。
- ii (407) イサーク・バーベリ (Isaak Emmanuilowitsch Babel 露 Исаак Эммануилович Бабель 1894-1940) オデッサでユダヤ商人の子として生まれ、モスクワで刑死したロシア・ソ聯の作家。オデッサの商科学校からベテルスブルクの医学系大学で法学を学びつつ創作を手掛け、ロシア革命と共に革命軍に志願し、やがて従軍記者となった。短編に才能を発揮して、ソ聯初期を代表する作家となったが、革命の現実に複雑な心境に追い込まれ、次第に創作でも寡作となった。スターリンによる大粛清の対象とされて1939年に秘密警察によって逮捕され、1940年に銃殺された。
- iii (407) セミョーン・ブジョーンヌイ (Semën Michajlovič Budënnij 露 Семён Михайлович Будённый 1883-1973) ヴォロネジ (Воронеж) に生まれ、モスクワに没したソ聯邦元帥。コサック村の貧農に生まれ、軍隊に入って、日露戦争にも参加した。ロシア革命の後ボリシェビキに参加し、また1919年にソ聯共産党に入党して白軍に対する赤軍の指揮官としてコーカサス、クリミア、ポーランドを転戦した。一貫して騎馬軍団に関わり養馬の運営に習熟していた。内戦から第二次世界大戦のモスクワ防衛までたびたび前線に立ったが、機械化部隊の重要性を認識せず、失敗も多かった。1935年にソ聯邦の最初の元帥の一人として賞され、後にはソ聯共産党中央委員やソ聯邦最高会議幹部会のメンバーにまで登った。
- iv (408) フーゴ・フォン・ホフマンスタール (Hugo von Hofmannstahl 1874-1929) ウィーンに生まれ、ローダウン (Rodaun / Wien 今日ハウィーン市域) に没した詩人・劇作家。富裕なユダヤ人商家の子で、少年期からニーチェの影響を受け、またシュテファン・ゲオルゲとの交流を得るなどし、ウィーン大学での法学の勉強を放棄して藝術活動に入った。早熟であり、オーストリアの世紀末藝術の代表者となった。オペラの台本も手掛け、ザルツブルク音楽祭の創設を企画したメンバーの一人となった。「チャンドス卿の手紙」(*Ein Brief des Lord Chandos an Francis Bacon*) は架空の文人フィリップ・チャンドスがイギリスの貴族で哲学者フランシス・ベーコン (Francis Bacon 1561-26) に宛てた書簡と言う設定で書かれたエッセイで、1902年に発表された。
- v (410) アリストテレス (Aristotélēs B.C.384-322) の目的論 (Teleologie) 神ならざる存在としての人間はそれ自体で自足できず、デュナミス (可能態) からエネルゲイア (現実態) を経てエンテレケイア (完全現実態) への運動の途上にあるとして、人倫・社会・政治をもその一部として位置づけられた。
- vi (410) オリゲネス (Origenes Adamantius ca.182 or 185-251) アレキサンドリアに生まれた初期キリスト教の教父として大きな存在。教義学の設定者とされる。デキウス帝の迫害に遭い、獄中で没した。死後、異端とされたため、著作の多くが失われた。
- vii (410) アウグスティヌス (Aurelius Augustinus 354-430) タガステ (Tagaste 今日のアルジェリアのスーク・アハラス Suq Ahras) に生まれ、ヒッポ (Hippo Regius 今日のアルジェリアのアンナバ Annaba) に没した古代の教父。生没地ともに今日のチュニジアに近接し、古代のヌミディアにあたる。キリスト教がローマ帝国によって公認され国教とされた時期に教義の深化につとめ、以後の西欧キリスト教の基本をつくった。
- viii (410) トマス・アクィナス (Thomas Aquinas ca.1225-74) イタリアのアクィノ近郊ロッカセッカ城

- (Roccasecca) に生まれ、フォッサノヴァ僧院 (Fossanova) に没した神学者。ドミニコ会士。スコラ学と呼ばれる西ヨーロッパ中世のキリスト教教義の体系化である『神学大全』を著した。
- ix (410) ミシェル・ド・モンテーニュ (Michel Eyquem de Montaigne 1533–92) ボルドーに近いペリゴール地方 (ほぼ現在のドルドーニュ県) モンテーニュ城に生まれ同地に没した政治家・思想家・ユマニスト。ユダヤ系フランス人。トゥールーズで法学を学び、法官として裁判所に勤務したが、38歳で職を辞して、終生関わることになる『エッセイ』の執筆につとめた。カトリック教徒であったが、穏健でプロテスタントの知己も多く、フランス国王シャルル九世、アンリ三世、また特にアンリ四世から政治への参加を望まれた。1581年から85年までボルドー市長を務めた。「レイモン・ズボンの弁護」(*Apologie de Raimond Sebond*) 『エッセイ』第二巻十二章にあたる長大な論説で単独でも刊行されることがある。なおレイモン・ズボン (ラモン・シビウダ Raimundus Sabundus 本名 Ramon Sibiuda ca.1385–1436) はバルセロナに生まれ、トゥールーズに没した神学者。トゥールーズ大学教授・同学長。その著作『被造物あるいは人間に関する論書』(*Liber creaturarum sive de homine*. 1436) をモンテーニュはフランス語に訳して1569年に刊行した。
- x (411) ルネ・デカルト (René Descartes 1596–1650) 仏アンドレ・エ・ロワール県ラ・エー (La Haye en Touraine) に生まれ、ストックホルムに没した哲学者。その哲学には人間の思念能力との対比で動物にはそれが欠如しているとの論説が入っている。デカルトの記述は常識的なものとも見えるが、賛同者や後継者によって動物が感覚をもたない機械に近い存在という受けとめ方が流布された。
- xi (411) バールーフ・デ・スピノザ (Baruch de Spinoza 1632–77) アムステルダムに生まれ、デン・ハーグに没したオランダの哲学者。ユダヤ人。その思想は、合理主義哲学、また汎神論とも分類される。終生を費やした『エチカ：幾何学的方法による証明』(没後 1677刊) で知られる。
- xii (412) イマヌエル・カント (Immanuel Kant 1724–1804) プロイセンのケーニヒスベルク (現在のカリニングラード) に生まれ没したドイツの哲学者。ケーニヒスベルク大学教授。その著作『人倫の形而上学の基礎づけ』(道徳形而上学原論 *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*. 1785) には動物に言及した箇所があり、動物倫理では必ず取り上げられる。〈人間が自分のために羊の皮を剥ぎ、お前は人間のために存在すると言い放った、というのが人間と動物との関係の起点である〉との件がよく引用される。
- xiii (412) ジェレミ・ベンサム (Jeremy Bentham 1748–1832) ロンドン市東域スピタルフィールズ (Spitalfields / London) に生まれ没した思想家・法学者。オックスフォード大学に学び法曹界に入ったが、幻滅して著述生活を送った。行為・政策における〈最大多数個人の最大幸福〉を重視する功利主義 (Utilitarianism) の理論的な基礎を築いた。
- xiv (412) アルトゥール・ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer 1788–1860) ダンツィヒ (Danzig 現グダニスク) に生まれ、フランクフルト・アム・マインに没したドイツの哲学者。はじめゲッティンゲン大学で医学を目指したが、哲学に移って、ベルリン大学でフィヒテの講義を聞いた。仏教を独自に取り入れて、観念論哲学とは一線を画した哲学を構築した。1820年にベルリン大学の講壇に立ったが、人気絶頂であったヘーゲルの前に受講生はほとんどなかった。1831年からはフランクフルト・アム・マインに住んだ。
- xv (414) リン・ホホワイト (Lynn Townsend White Jr. 1907–87) 米・加州サンフランシスコに生まれた中世史家。ハーヴァード大学で学び1934年に学位を得て、1943年以後、オークランドのマイルズ・カレッジ、プリンストン大学、スタンフォード大学で中世史の教授をつとめ、1958年から1974年に退官するまでロスアンゼルス大学で教えた。中世の科学史に厚く、その社会的影響の解明に特色がある。ここで取り上げられた論文は科学誌『サイエンス』に発表されたことによって多大の反響を呼んだ。書誌データは次である。*The Historical Roots of our Ecological Crisis* (1966). In: *Science*, Band 155, 1967, S. 1203–1207.
- xvi (414) ゲルハルト・リートケ (Gerhard Liedke 1937–L) カールスルーエに生まれたプロテスタント神学者。ペーテル (プロテスタント教会大学)、ハムブルク、チュービンゲンなどで神学を学び、牧師の資格を得、1968年にハイデルベルク大学で旧約聖書の研究で学位を得た。神の創造に関わる神学 (Schöpfungstheologie) に厚く、自然科学と神学との重なり、またそれを素地にした平和学の論客として知られる。

- xvii (414) ウード・クロルツィク (Udo Krolzik) 不詳。
- xviii (415) サン・ヴィクトワールのユーク (Hugo de Saint Victoire 1096-1141) ブランケンブルク伯コンラート (Konrad von Blankenburg) の息子としてザクセンに生まれ、1115年から1118年の間にパリのサン・ヴィクトワールのアウグスティノ修道会僧院に入った。アウグスティヌスの教義を根幹にして、世俗学と神学を繋ぐ体系を構想した。特に創世記における神の創造に関する理論的考察を論じた。『学習論』(Didascalion) は主著の一つ。
- xix (416) ヴァルター・グロース (Walter Groß 1941-L) プロテスタント神学者。
- xx (417) ミヒャエル・ヴェルカー (Michael Welker 1947-L) エアランゲンに生まれたプロテスタント神学者。西ベルリンとプファルツのグリーンシュタット (Grünstadt RP) で成長し、チュービンゲン大学で組織神学を学んで1973年に同大学で学位、また1978年にハイデルベルク大学で哲学の学位、1980年にハイデルベルク大学でホワイトヘッドのプロセス神学の研究で教授資格を得た。1983年から1988年までチュービンゲン大学の組織神学の教授の後、ミュンスター大学の教授を経て、1991年から2013年に定年となるまでハイデルベルク大学において組織神学と教義学の主任教授をつとめた。神学関係の多くの専門誌の編集にたずさわり、また英・米・加の諸大学で客員教授を歴任した。
- xxi (417) ヴォルフガング・ネートヘーフェル (Wolfgang Nethöfel 1946-L) オーバーハウゼン (Oberhausen NW) に生まれた社会倫理学者・プロテスタント神学者。マールブルク大学教授。
- xxii (418) ユルゲン・モルトマン (Jürgen Moltmann 1926-L) ハムブルクに生まれた神学者。ナチス・ドイツの軍隊に入って捕虜となり、戦後、ゲッティンゲン大学神学部やイギリス留学を経てプレーメンで牧師となった。1958年ヴァータール神学大学、次いでボン大学で教え、1967年から1994年に定年となるまでチュービンゲン大学のプロテスタント神学の教授であった。エルンスト・ブロッホの刺激を受けつつ〈希望の神学〉を唱えた。多くの著作があり邦訳もある。
- xxiii (419) ペーター・ザラディーン (Peter Saladin) とクリストフ・ツェンガー (Christoph Zenger) 本稿が書かれた当時、ベルン大学法学部の特任教授あるいは非常勤講師であつたらしい。
- xxiv (419) ハンス・ケスラー (Hans Kessler 1938-L) シュヴェービッシュ・グミュント (Schwäbisch Gmünd BW) に生まれたカトリック神学者。チュービンゲン大学とヴュルツブルク大学で哲学とカトリック神学・プロテスタント神学を学び、1987年から2003年までフランクフルト・アム・マイン大学において組織神学 (教義学と基礎神学) の教授であった。
- xxv (419) ゲルト・フォン・ヴァーレルト (Gerd von Wahlert) 不詳。進化エコロジーの論客。
- xxvi (419) フィリップ・シュミッツ (Philipp Schmitz 1935-2015) ケルンに生まれ没したカトリック神学者。法学の勉強を中断して、1957年にイエズス会へ入り、同会の高等教育のなかで1970年に学位、1975年に教授資格を得た。1975年から1996年までフランクフルト・アム・マインの哲学・神学大学ザンクト・ゲオルゲン (Philosophisch-Theologische Hochschule Sankt Georgen) においてモラル神学を担当し、1996年からローマのグレゴリアン大学のモラル神学の教授をつとめ2008年に定年となった。
- xxvii (419) フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ (Friedrich Wilhelm Graf 1948-L) ヴッパータール (Wuppertal NW) に生まれたプロテスタント神学者。チュービンゲン大学とミュンヘン大学で哲学・神学・歴史学を学び、神学の分野で1978年に学位、1986年に教授資格を得た。1988年にアウクスブルク大学教授、2013/14からミュンヘン大学の組織神学の主任教授をつとめる。
- xxviii (419) カール・バルト (Karl Barth 1886-1968) スイスのバーゼルに生まれ没したプロテスタント神学者。バーゼル大学の神学教授の子で、はじめ父が教鞭をとるベルン大学、次いでベルリン大学でアードフル・フォン・ハルナックに就き、またマールブルク大学でヴィルヘルム・ヘルマンから教義学を学んだ。1910年に改革派教会副伝道師、次いで牧師として活動した。主著の一つとして「ローマ書」のギリシア語からの翻訳と独自解釈によって知られるようになった。1922年にゲッティンゲン大学で教えるようになり、次いでボン大学教授となったが、ナチスへの宣誓を拒否して停職となり、1935年からバーゼル大学教授をつとめた。『福音主義神学』、『教会教義学』など20世紀の神学を代表する著作がある。
- xxix (419) ヴォルフガング・フーバー (Wolfgang Huber 1942-L) ストラスブールに生まれたプロテスタント神学者。ハイデルベルク大学とゲッティンゲン大学で学び、1966年にチュービンゲン大学でプロテスタント神学の分野で学位を得た。1972年に組織神学の研究によりハイデルベルク大学で教授資格

- を得た。1984年から1994年までハイデルベルク大学で組織神学の教授。ベルリン＝ブランデンブルク＝シュレージシェ・オーバーラウジッツ福音主義教会（＝プロテスタント教会）監督などをつとめた。
- xxx (419) エックハルト・ヘンシャイト (Eckhard Henscheid 1941-L) バイエレン州オーバープファルツの小都市アムベルクに生まれた作家。はじめミュンヘン大学に学んでゴットフリート・ケラーのテーマで修士学位を得たが、やがてフリーの作家となった。社会批判や権威への批判をこめた諧謔的な作風を示す。
- xxxii (419) アンドリュー・リンゼイ (Andrew Linzey 1952-L) 英・公会の牧師、オックスフォード大学神学部で教鞭をとる〈動物のための神学〉のオピニオン・リーダー。「動物倫理オックスフォード・センター」を創設し主宰している。[邦訳] 宇都宮秀和 (訳) 『神は何のために動物を造ったのか —— 動物の権利の神学』(The Theos-Rights of Animals 1987) 教文館 2001。
- xxxiii (420) イェルク・ライムバッハー (Jörg Leimbacher) 環境・動物倫理をテーマとする法学の研究者。本稿の参考文献に挙げられているのはベルン大学に提出された学位論文の要旨で、まとまった形では1989年に『自然の権利』(Die Rechte der Natur) のタイトルで書物として刊行された。
- xxxiiii (420) ゲッツ・リュムブラー (Götz Ruempler) 動物学者。この本稿の当時、ライン地方中部ミュンスターのアルトヴェター動物園 (Altwetterzoo) の園長であった。
- xxxv (420) エリーヒ・グレーサー (Erich Ludwig Gräßer 1927-L) ザールラント州シュヴァルバッハ (Schwalbach) に生まれたプロテスタント神学者。ヴッパータール、チュービンゲン、マールブルクの諸大学で学び、また牧師として活動した。1955年に学位、1964年に「ヘブライ人への手紙」における信仰問題で教授資格を得た。1965年から1979年までボーフム大学神学部で新約聖書の教授をつとめ、次いでボン大学教授となって1993年に定年となった。アルベルト・シュヴァイツァー学術協会の理事長をつとめたこともある。1993年の発足にあたっては夫人も設立者の一人であった小政党「人権・動物権利党」(Tierschutzpartei) の活動家でもある。
- xxxvi (420) アドルフ・ポルトマン (Adolf Portmann 1897-1982) バーゼルに生まれ、バーゼル郡ビンニンゲン (Binningen) に没した動物学者・人類学者・自然理論家。バーゼル大学で動物学を学んで1921年に学位を得、しばらく北海岸で海洋生物の研究所にかかわってウミウシなどの研究を続けた。1931年にバーゼル大学の動物学の教授となった。鳥類の研究から脊椎動物の形態学へ進んで、やがて動物学と社会学を架け渡す自然哲学を構想した。
- xxxvii (421) オイゲン・ドレーヴァーマン (Eugen Drewermann 1940-L) ルール地方ベルクカーメン (Bergkamen NW) に生まれたカトリック神学者。ミュンスター大学で哲学を学び、パーダーボルンでカトリック神学を学んだ。1966年に司祭となった。1978年にパーダーボルンでカトリック神学の分野で教授資格を得て、1979年からパーダーボルン大学神学部の私講師となったが、ジャーナリスティックでファナティックな傾向があったことから、パーダーボルン大司教デーゲンハルト (Johannes Joachim [Kardinal] Degenhardt 1926-2002) によって教鞭を執る資格を制限された。専門はモラル神学で、神学を素地にした心理療法やエコロジーの活動などで話題を呼んできた。
- xxxviii (421) アルベルト・シュヴァイツァー (Albert Schweitzer 1875-1965) アルサスのカイザースベルク (Kaisersberg 現在は仏のケゼルスペール Käysérsberg) に生まれ、アフリカのガボンのランパレネ (Lambaréné) に没したプロテスタント神学者・医師・オルガニスト・ヒューマニスト。ストラスブール大学に学んで神学と哲学の学位を得て、27歳で同大学の神学講師となった。アフリカでの医療活動と伝道を志して30歳から医学を学び、38歳のときにアフリカへ渡り、ヒューマニズムの立場からの活動に挺身した。バッハのオルガン曲の解釈と演奏でも存在を發揮した。神学を素地とする多くの著作がある。1952年にノーベル平和賞を受賞した。